The Real Face
SPECIAL INTERVIEW

家田荘子

ノンフィクションの愛

取材・文／藤本育子
写真／ハリー中西
協力／近鉄劇場　（株）ヒロ・プロダクション
都ホテル大阪

The Real Face

SPECIAL INTERVIEW

「表の世界の人が知らないことを私はたくさん知ってるという自信がありました。負けたくなかったし…」

「家田さんは、どんなジャンルの記事なら書けると思う？例えば政治とか、経済とか…」
ジャーナリストに聞かれて一言、
「せ・っ・く・す、です」
これが、私がはじめて業界の人とした仕事の会話だった。（角川文庫「私がノンフィクションを書く理由」より）

ノンフィクション作家・家田荘子のイメージは？と問えば、「強い女」という答えが過半数を占めるだろう。それぐらい彼女の描く世界は強烈で、スキャンダラスで、過激。一般世界を「表」とするならば、極妻やリゾラバ・ドラッグ・エイズ等は「裏」、平々凡々と暮らしている人々には無縁と思われがちな世界だ。だからこそ、読者は未知なる「裏」の情報を欲し、自分たちが自ら足を踏み入れることの出来ない世界に体当たりで突入する彼女の姿を見て「強い女」のレッテルを貼るのだろう。だが、強いというだけで彼女は次々と作品を生み出すことが出来るのだろうか…。

「そこが大きな間違いなんですよ（笑）。確かにノンフィクション作家・家田荘子という看板をしょっていれば、強さも出さなければならない。皆さんにそう期待されている部分がありますからね。ただ、やみくもに強い女だと誤解され、そのイメージだけが先行してしまうのはつらいです。イメージに自分がついていかなければなりませんから。たまたまやっている仕事の内容が強い世界なので、私も強いんだと思われてしまうんでしょうけど、そのギャップをどう埋めたらいいのか…。でも、私にとっては普通の世界、一番居心地のいい世界なんです」。

学生時代から「私は女優になるために生まれてきた人間だ」と豪語し、女優としての自分をアピールし続けた。大学卒業後、OL生活に足を踏み入れたが、女優の道をあきらめきれず、ふたたび売り込み作戦を開始。その間も、大好きな六本木の街に繰り出さなかった日はなかったという。この時、見聞きした同世代の女性の姿をたまたま業界人に話したところ、いつのまにか取材記者の一員となっていた。これがノンフィクション作家・家田荘子のスタートだ。

「取材記者といっても、書くことの基礎さえ知らなかったんです。内容も風俗ネタばかりだったしね。ずいぶん見下されてきましたよ。裏の世界の奴はそれらしくしてろ！みたいな…ね（笑）。でも、表の世界の人が知らないことを私はたくさん知ってるという自信がありました。負けたくなかったし…」。

「死ぬまでこの緊張が消えないんですね。皆、笑っているけれど心の中じゃ泣いているんですよ」と涙声になっていく姐さん。そして最後はいつだって「しゃあないか。自分で選んだ道なんやから」と笑って背を向けていくのだった。（文藝春秋「極道の妻たち」あとがきより）

確かに彼女はある種の強さを秘めている。それは俗にいう男性的な強さではない。もっと恐があるというか、心あるというか…。

「もともと口下手なので、取材の申し込みさえも出来ない時があるんです。だから体ごと預けちゃう。そばにいるうちに何か話してくれるのをひたすら待つ。そうやって同じ空気を吸っているうちに、だんだん好きになっちゃって…心底惚れ込んだり、共感できたり、その人と同じ行為は出来なくても、納得する部分が出てきたり…。もちろん、どうしても好きになれなくて、それが文章に出てしまう事もありますよ。『バブルと寝た女たち（講談社）』は取材中が超・貧困だったので悔しさが思い切り文章に出てたりして（笑）。取材で一番辛いのは、相手が本当に辛いとわかっている状況の時に、どんな気持ちなのかを尋ねなければならない事。レポーターも同じだと思うけど、どんなに辛いのかを語ってもらうのは、私自身、最も辛い瞬間です。裏の世界は伝えたくないぐらい悲しいことが多いから…。取材時は一生懸命頑張っていても、二年後、三年後はあまりいい状態になってなくて…悲しいですね。

ドラッグ関連を扱っている時は『どうして目の前にドラッグやっている娘がいるのに、何故、助けないんだ』とクレームがきたりしました。でも、それはその人自身の人生であって、私がドラッグをやめさせたとしても、その娘の人生を一生背負うことは出来ない。私がノンフィクションを書く上でいつも頭に置いているのは、『自分の物差しで人の人生を計ってはいけない』ということ。タイに行って売春をやっている娘を取材しても、やめさせたからといって彼女のファミリーや彼女自身を背負うことは出来ない。でも取材をさせて下さった方は私を求めているんじゃないんです。例えばエイズで苦しんでいる人のそばに私がついていても、彼女が心から求めているのはBFだったり…。冷たく聞こえるかもしれないけど、中途半端な手を差し伸べるぐらいなら、手を出さないほうがいい。私がノンフィクションという世界を通じて一番訴えたいの

体当たりなノンフィクション作品で一世を風靡した作家、家田荘子。
か細くて小さい彼女の波瀾万丈な人生には、いつも愛があふれていた。
今も、そしてこれからも…。

は、こんな人生もあるんだ、こんなのもあるんだ、この事実をあなたはどう思うの？ということ。もちろん、とらえ方は人によって違うし、反応もバラバラです。でも、それによって何かを感じてもらえれば嬉しいし、それが私に出来ることなんです」。

私は、この先、いったいどれだけのテーマに恋することができるだろう。なぜ、辛い、苦しい、と愚痴をこぼしながらも、好きでもないノンフィクションを追うのだろうか。そんなに苦しいならやめればいいと思うのに…。

（PHP研究所「絆」あとがきより）

ノンフィクションを書き続ける限り、永遠に巡りあわなければならない取材対象者。その一人一人に身も心も預け、小さな体がボロボロになるまで追い続ける。そんな彼女の著書には、単なる強いだけの女の言葉はみじんもない。たとえそれが非難に値する言葉であっても、心底、相手を思いやり、理解し、愛を送っていることがひしひしと伝わってくる。

「自分をどこでどう切り放し、次のステップに進んでいくか…ノンフィクションの一番難しい問題だと思います。一度トライしたものをズルズルとひきずってしまいますので。今現在、ボーッとした状態の真っ只中です。二年程時間をかけた『極道の子供たち（フライデー連載）』を終えたばかりなので…。もともと気が向かないと働けない人間なので自分がひらめくまで待つしかないんです。ひらめいて、魅せられないと、ノンフィクションみたいな仕事、やってられませんから（笑）」

取材対象者を探す。一見、簡単にみえるこの作業ほど骨の折れるものはない。「私は〇〇です」と背中に書いて歩いている人間などこの世に存在しないからだ。それが裏の世界になればなるほど、自分の追うテーマに合う人間を探し出すことは困難極まりない。人脈を拡大し、電話をかけまくり、やっと捕まえたと思えばひきずられるだけひきずられ、ポイッと捨てられる。まるで貢ぐだけ貢がせて、いただきま～すという所で捨てられてしまう悲しきミツグ君、といったところだ。もちろん、取材にOKが出ても上手くいくとは限らない。山のような苦労が、この後も手ぐすねひいて待ち受けているのだ。

「途中でお金がなくなっちゃったり、手間暇かかりすぎてしんどくなっちゃったり…ガーッとのめり込まないとつぶされちゃうんですよ、そんな気持ちに。中途半端な気持ちでは出来ませんからね。ノンフィクションは相手の心にどう入りこめるかという戦いなんです。だからこそ、作品として出来上がったときの喜びがあるんです。編集者との共同作業でもあるし…。やっぱり、書いてて自分の好きな作品って出てくるんですよね。だから、なおさらその本を皆さんに読んでいただけるのが嬉しいんです」。

ありがとう。あなたがここにいてくれることが、最高なのよ。達ったばかりなのに、どうしてかわかんないけど、

The Real Face

SPECIAL INTERVIEW

「私、泣き虫なんですよ。仕事では絶対泣かないんですけどね。」

私あなたのことが愛しくて仕方ないのよ。ありがとう…。（PHP研究所「絆」より）

ノンフィクション作家である彼女の著書の中に『二十八歳の極道グラフティ（PHP研究所）』をはじめ、数冊のエッセイがある。そこには、ノンフィクションの中の強く、たくましい家田荘子は存在しない。飾らない“素顔”だけが見え隠れしているのだ。

私事で申し訳ないのだが、筆者は『絆』というエッセイを読んで思わず泣いてしまった。それも思い切り…。これは女だからというあまり使いたくない言葉が関係しているからかもしれない。

もちろん、筆者でもある彼女が、女性へのウケを狙って書いたものではない。なんのまといもなく、まっすぐに、ひたすらに、早産・帝王切開という自分の出産体験から障害を持つかもしれないベイビィ、異国の地のファミリー、自分の両親、夫、エイズである友人への想いを綴った、家田荘子・等身大エッセイなのだ。（詳しくはぜひ一読を！）

「私もこの前泣いちゃいました。ちょっと辛いことがあって、ふと読み返して…。自分の本を読んで泣くなってヤツですよね（笑）。私、泣き虫なんですよ。仕事では絶対泣かないんですけどね。元・夫とは、本当に不思議な関係だと思います。ベストパートナーであることには変わりないんですけど…まぁ、子供を真ん中に置いた、ちょっと変わった愛の形かな。今、そのこと（二人の離婚について）を書くために、原稿用紙にむかっては何行か書いて、やめてしまうという状態が続いています。担当の編集者から『作家はストリッパーと一緒だから、早く服を脱がなきゃダメだ』といわれているんですけど、勇気がわかなくて…。きっと、ちゃんと作品として出来上がった時、はじめてこの問題を乗り越えて、口にすることができるんでしょうね」

家田荘子の愛。それはトレンディドラマの中で甘く語りあう愛とは大きく異なっている。取材対象者へ向ける愛、家族に向ける愛、読者に向ける愛、そして、この春発売された『アブノーマル・ラバーズ（略してアブ・ラバ）』という変態と呼ばれる人々を取材した本や五月初旬からはじまったスポニチの小説は、私の中でまったく新しい分野のものです。イケイケの女の子たちの実態というか、表向きの派手な部分と好きな男の子を想い続ける内面的な部分をしっかり出せていけたらなっと。同時に新しい夜遊びスポットも紹介できるものになると思います。あとセク・ハラもやります。あっ、海外ものもやりたいですね。お金を出してくれるところ、探してます（笑）」。

第二十二回大宅荘一ノンフィクション賞を受賞した『私を抱いて、そしてキスして』以降、彼女のほとばしる愛のパワーは、エイズ問題にも注がれ続けている。先日行なわれた『近鉄アーバントークvol29 私の体験レポートから』の会場で、彼女は後半のほとんどの時間、エイズ問題について熱く語った。ボランティアはやってあげるものではなく、やらせて頂くものであるということ、愛する人がいればこそ、エイズという問題を真剣に見つめなければならないこと…。

「エイズは“愛”。汚い言葉を吐けば、汚い言葉が返ってくるし、愛を訴えれば愛が返ってくる。エイズ問題だけに限らず、愛とは、そんなものじゃないでしょうか」。

今後、家田荘子はどんな愛をつかむのか。そして、私たちにどんな愛を贈ってくれるのか…。この先、一波乱も二波乱も巻き起こしそうな彼女の動きにご期待あれ!!

使用目的で選ぶ!
日やけ止め
の選び方

OMi

リゾート「強烈」
おでかけ「日常」
化粧下地には…
やっぱり「薬用」

強烈紫外線用
真夏のリゾート
ハードな陽ざしに…
近江兄弟社メンターム
UVミルキィハード

日常紫外線用
毎日のお出かけや
通勤・通学に…
近江兄弟社メンターム
UVミルキィデイリー

化粧下地用
メイク前の
化粧下地用に…
近江兄弟社メンターム
薬用UVケアホワイト

株式会社 近江兄弟社
近江兄弟社
メンターム

◆家田荘子プロフィール◆

愛知県生まれ。日本大学芸術学部卒。在学中から女優を目指し、藤田敏八監督作品等に出演。その後、繁華街の風俗レポートを皮切りに、デビュー作「俺の肌に群がった女たち」、「極道の妻たち」、「代議士の妻たち」、を発表、脚光を浴びる。以後、エイズ患者とともに生活した一年を綴った「私を抱いてそしてキスして」が大宅荘一ノンフィクション賞を受賞。精力的に話題作を発表し続け、第一線で活躍するノンフィクション作家。「原色の愛に抱かれて」、「イエローキャブ」、「ラブジャンキー」、「バブルと寝た女たち」「アブノーマル・ラバーズ」等多数。延べ十五本が映像化されている。厚生省エイズ予防対策委員会委員。